

ふるさと見て歩き

第78回

長倉の炭鉱

物資が欠乏していた戦時下、経済封鎖のため連合国側の国々から燃料を輸入できない日本は、国内で産出する質の悪い燃料の採掘にも着手せざるを得ませんでした。

このようななか、御前山地域長倉地区から産出する亜炭(褐炭)も注目され、往時は二つの会社が採掘を行っていました。

◇亜炭の産出

亜炭は太古の樹木が地層中に埋もれ、石炭に変化していく途中の状態のもので、従って石炭に比べて



▲亜炭 (歴史民俗資料館山方館)

燃焼カロリーが低く、工業用には不向きですが、家庭用として、明治時代から一九五〇年頃まで、全国規模で採掘されました。

長倉上町には、国長層(新生代新第三紀中新世・一七四〇万年頃)に含まれる亜炭を東京の実業家が採鉱した「加最炭鉱長倉採鉱所(通称長倉炭鉱)」と、東京・福島にも事業を展開する倉橋炭鉱の二社があったようです。両社とも百名内外の坑夫・選炭婦を使用し、採掘した亜炭は大宮のトラック会社に委託して茨城鉄道の御前山駅まで運び、駅からは貨車に積み替えて東京方面に搬出していました。このうち加最炭鉱は、中島飛行機製作所と昭和飛行機製作所と特約していたようです。



▲炭鉱施設の一部であった空気坑

茨城鉄道は赤塚(水戸市)と御前山(城里町沢山)を結んだ鉄道で、大正十五年(一九二六)に開通し、昭和四十六年(一九七二)まで存続した鉄道です。

地元の方によれば「蒸気機関車の時代、茨城鉄道で、終戦前後の物資不足の折に長倉炭鉱の亜炭を燃料として使ったが、質が悪くて上水戸への坂が上れず乗客が降りる始末だった。亜炭の層も薄く、四年程で炭鉱は閉じてしまった」とのことです。現在、長倉炭鉱の坑口は埋もれてしまい確認できませんが、施設の一部やボタ山の跡地を確認できました。短い操業期間でしたが、地元の人々にとつては戦時下の重要な収入源だったということです。

◇首なし事件

長倉炭鉱を巡っては、大きな事件が起きていました。

昭和十九年(一九四四)一月二十一日、長倉炭鉱の鉱夫が取り調べを受けた大宮警察署で変死するという事件が起こりました。当初、死因は「脳溢血」とされましたが、それに疑問を持った正木ひろし弁護士が、蒼泉寺に仮埋葬されていた遺体から首を切り取り、東京で解剖を行うなど、十二年にわたる地道な努力の末、直接の死因は殴打によるものであり警察による拷問死であったことを立証したのです。戦時下、警察権力と対立することは国家と対立することと同義でした。そのため、称えられるべきはずの正木弁護士の功績は、当時マスコミでほとんど取り上げられず、事件は闇に葬られてしまふところでした。

事件の背後には、鉱区を巡る炭鉱間の軋轢もあったようですが、むしろ戦時下の警察権力、官憲の圧政が招いた事件といえるでしょう。

この事件は後に「首なし事件」としてセンセーショナルに報道され、正木ひろし弁護士や同じく弁護士で司法省委員を務めた山本糸吉による手記や回顧録が出版されました。また昭和四十三年(一九六八)には事件を題材とした「首」(東宝)という映画が公開されました。



▲正木弁護士が調査の際、宿泊した長倉の旧今出屋旅館

【参考文献】正木ひろし『首なし事件の記録』講談社現代新書 一九七三、山本糸吉『首なし事件(同)』わが生涯の回顧』山本糸吉事務所 一九六六)

*菊池芳文監修『企画展示解説「常陸大宮の地下資源」地域をささえた宝物』より引用し、加筆しました。

歴史民俗資料館大宮館
52-1450